

女子大学生のライフコース選択に及ぼす家族の影響についての研究

手塚紀子*¹・古屋健*²

Family influence on life-course selection among female university students

TEZUKA Noriko and FURUYA Takeshi

Abstract

National Institute of Population and Social Security Research defines women's 5 life courses as follows; Full-time housewife, Return-to-work, Managing both work and family, DINKS, Single and working. For female university students, which life course is the ideal course and which life course they plan to lead? This study examines following three hypotheses as factors influencing their choice. The first hypothesis is that mother's life course selection tends to influence the life course selection of female university students and to choose the same life course as their mothers. The second hypothesis is that internal psychological factors (ability, motivation, sense of value, sex role orientation, career orientation, etc.) of individuals affects the life course selection. The third hypothesis is that the family (mother-daughter relationship, father-daughter relationship, expectation from parents, etc.) affects internal psychological factors of individuals. For questionnaire survey on 168 female junior or senior students, multiple regression analysis and discriminant function analysis were used. As to the first hypothesis if mothers life course is managing both work and family course, the female students tend to predict their future whether they will follow the same life course as their mothers. As to the second hypothesis career orientation, independent orientation and sex role orientation affect the selection. As to the third hypothesis good mother-daughter relationship, parents' expectation of independence and mental independence from mother affect their life course selection indirectly.

[Keywords] life course, family influence, career orientation, female university students

問 題

国立社会保障・人口問題研究所（2015）では、女性のライフコースを「ひとりの女性がおくる人生のタイプ」と定義し、仕事・結婚・育児の組み合わせから 1）専業主婦コース（結婚し子どもを持ち、結婚あるいは出産の機会に退職し、その後は仕事を持たない）、2）両立コース（結婚し子どもを持つが、仕事も一生続ける）、3）再就職コース（結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ）、4）DINKS コース（結婚し子どもを持たず、仕事を続ける）、5）非婚就業コース（結婚せず、仕事を一生続ける）の 5 つに分類し、理想ライフコース（理想と考えるコース）と予定ライフコース（実際になりそうだと考えるコース）を継続的に調査し、その結果を公表している。2015年に18歳以上35歳未満の未婚女性2570人を対象に実施された調査によれば、理想コースの1位は再就職コース 34.6%、2位は両立コース32.3%、3位は専業主婦コース 18.2%で、予定ライフコースの1位は再就職コース31.9%、2位は両立コース28.2%、3位は非婚就業コース21%であった。

わが国では少子高齢化が急速に進行し、厚生労働省統計では40年後には労働力は1/2に低下すると予想されている。

* 1 岡崎人事コンサルタント

* 2 立正大学心理学部

将来にわたり安心して暮らせる活力ある社会を実現するためには、女性の潜在力を引き出し、活躍を推進することが鍵となる。ところが、このような調査結果が示すように、育児による離職が少ない欧米先進国の女性とは異なり、日本では結婚や育児で一度は離職することを考えている女性が多く、女性の社会進出の機運が高まりをみせていないのが現状である。労働力率のM字型曲線についても、底上げがなされたように見えても、現実には晩婚化と晩産化による見かけの現象であると指摘されている（吉田, 2004）。また、近年、急激に減少しているものの、専業主婦を理想とする女性も未だ少なくない。

そこで本研究では、若い女性が自分のライフコースを展望する時に影響を与える心理的要因を明らかにすることを目的とした。特に、将来の潜在的労働力として期待される女子大学生が、進路決定を前にして、どのようなライフコースを理想とし、そこにどのような心理的要因が関与しているかを解明することは、高等教育におけるキャリア教育や進路指導を考える上で貴重な資料となるであろう。

ライフコース選択の規定因について

女性のライフコースに関する先行研究の中で、ライフコースの選択や分化にはさまざまな要因が影響を与えることが明らかにされている。たとえば、世帯の家計状況の要因が上げられる。中村（2008）によれば、女性が結婚した時、将来展望として就業継続か再就職を予想する上で、夫の年収が600万円未満であることが就業継続予想の目安となっているとした。また、杉田（2010）は、夫ではなく本人の年収が影響を与えるとした。また、家族を含めた周囲の就業促進・就業支援体制の整備の重要性も指摘される。嘉本（2004）、小坂・柏木（2007）、中村（2008）の研究では、祖母・夫などの家事育児のサポートがあることが就業継続の要因となることが明らかにされている。また、小坂・柏木（2007）は学歴・教育がライフコース選択の要因になることを示し、その理由として大学卒夫婦の方が高校卒夫婦より夫や夫の親から就労を反対されることが少なく、夫の家事サポートが高い事を上げている。また、大日（2015）は出身階層が高いほど性別役割分業に対して否定的な価値観を持ち、職業的地位達成を志向することを示した。

一方、このような社会的・外的要因による制約がない、理想のライフコース選択では、個人の心理的・内的要因の影響が大きくなる。大きな影響を与える心理的要因のひとつとして、「男は仕事、女は家庭」という伝統的性別役割観への信念の強さである。たとえば、鈴木（1996）は、20代から30代前半の女性を対象に、平等的性別役割態度と就労継続に関する関係を明らかにしている。また、佐野・高田谷・近藤（2007）は男女大学生を対象とした調査から、性別役割志向性と理想のライフコース、理想の結婚相手像、結婚後の暮らし方が影響しあっていることを明らかにした。伝統的性別役割観を持ち、自己および他者に対してそのような行動を期待する人は、女性の社会進出に対して否定的な態度を抱き、伝統的なライフコース選択を理想とする傾向があると考えられる。

一方、キャリア心理学の観点から、女性のキャリア志向性に影響を与える要因は理想ライフコースの選択においても大きな役割を果たしていると考えられる。そのひとつにSchein（1978）が提唱したキャリア・アンカーがある。宮城（2002）によればキャリア・アンカーとは「キャリアの錨」を意味し、概念的には「個人のキャリアのあり方を導き、方向付ける錨、キャリアの諸決定を組織化し、決定する自己概念」すなわち職業生活において「拠り所となるもの」と考えられる。金井（2002）は、Scheinのキャリア・アンカーの概念を用いた自己イメージのチェックのために、自分をどのように捉えているかを問う次の3つの質問を挙げた。1）自分は何が得意か、2）自分はいったい何をやりたいのか、3）どのようなことをやっている自分なら、意味を感じ、社会に役立っていると実感できるのか、これらの3問に答えることがキャリアの内省に役立つとしている。Scheinは、才能・能力、動機・欲求、価値・態度が統合された「自己概念」によってキャリア・アンカーは組織化されるとしていることから、本研究ではこれらをライフコース選択に影響を与える要因として検討した。

家族関係の影響について

本研究では、もうひとつの視点として家族がライフコース選択に与える影響にも着目した。家族が女性のライフコース選択に影響を与えることは、多くの先行研究から明らかである。たとえば、同居する祖母からの家事サポートによって母親の就業継続が可能になっている事例など、女性の就業に対して直接的に影響を及ぼすだけでなく（嘉本2004、小坂・柏木2007）、親の職業や親の態度や期待が女性の職業選択に影響を及ぼすことが明らかにされている（小川・田中、

1980、鹿内, 2007)。田中・小川(1985)によれば、ある職業では、親の養育・教育による子どもの人格形成と、子どもをとりまく職業環境が親と同じ職業を選択するように作用することで、職業継承性が高くなることが知られている。このような影響が理想ライフコース選択にも影響を及ぼすであろう。たとえば、松浦(2005)は、女子大学生を対象とした調査で、母親が両立型であった場合、母親の就労が早期であるほど、子どもの発達にポジティブな影響を及ぼすと捉え、母親が専業主婦であった場合は、母親の就労が遅いほど、子どもの発達にポジティブに作用すると、自分の養育環境や母親のキャリア選択を肯定する傾向があることを明らかにした。このような形で家族の影響を受けると、女性が理想のライフコース選択のロールモデルに自分の母親が選ばれる確率が高くなると予想される。

一方、進路決定において親の影響は親子関係の質によって異なることが示されている(Lease, & Dahlbeck, 2011; 鹿内, 2012)。ライフコース選択においても、家族関係でも特に同性である母親との関係が良好であれば、母親がロールモデルとして採用され、そのライフコースを肯定的に受容する傾向も高いであろう。しかし、母親との関係が悪い場合は、モデルとならないだけでなく、異なった職業やライフコースを選択することが予想される。大学生の母子関係は幼少時からの愛着形成過程によって規定されることから、現在の関係だけでなく、幼少期の母子関係まで含めて検討する必要がある。

さらに、家族はライフコース選択の規定因に対して影響を与えることで、間接的に子どものライフコース選択に影響を及ぼす可能性がある。たとえば、子どもの結婚、出産、就業に対する親の期待、育児や家事に関して親から期待できるサポートなどが個人のキャリア志向性に影響を与えることが考えられる。また、家庭生活で観察される両親の性役割分担は、その中で育つ子どもの性役割観に影響を及ぼすだろう。

本研究の仮説

本研究の目的は、女子大学生の理想ライフコース選択に影響を及ぼす心理的要因と家族関係の要因について、次のような仮説を立てた。

仮説1：母親のライフコースが女子大学生のライフコース選択に影響を与え、母親と同じライフコースを選択する傾向がある。また、母親との関係が良好であるほど、その傾向も強い。

仮説2：個人の内的・心理的要因(性役割志向性、キャリア志向性、育児観・職業観など)が女子大学生のライフコース選択に影響を与える。

仮説3：家族関係(母娘関係、父娘関係、両親からの期待など)は個人の内的要因に影響を与え、間接的にライフコース選択に影響を与える。

以上の仮説を検討するため、本研究ではまず大学3年生以上の女子大生を対象にした予備(面接)調査を実施した。予備調査では半構造化面接を行い、就労継続や離職の意思、育児観、キャリア志向などライフコース選択に影響を与える個人の内的要因の他に、家族からの影響についても調査した。本調査では、予備調査の結果を踏まえ、職業選択の方向性が限定されない社会科学系・人文学系の学部在籍し、就職活動や進学準備を視野に活動中あるいは活動を間もなく始める大学3・4年生の女子大学生を対象に、質問紙法による調査を実施し、母親のライフコース、個人の価値観、態度、志向性等の内的要因、およびそれらに影響を与える家族要因に関する仮説を検討した。

予備調査

I. 参加者

面接対象者は、都内R大学および大学院に在学中の女子大学生および大学院生30名(平均年齢20.67歳, SD=0.42)である。学年内訳は、修士課程1年生2名、学部4年生12名、3年生16名である。

II. 方法

「女性のキャリア形成とライフコース選択に影響を与える要因」に関する社会心理学的研究のための面接調査であることを参加者に伝え、半構造化面接を実施した。最初に国立社会保障・人口問題研究所が定義した女性のライフコース5種類(専業主婦コース・両立コース・再就職コース・DINKSコース・非婚就業コース)と、どれにも当てはまらない場合は「その他」の計6種類のライフコースの中から、理想ライフコースと予定ライフコースの選択を求めた。質問は準

備した10項目54問を基本とし、面接対象者の回答により派生した新たな質問も合わせて行った。主に本人のライフコース選択、両親との関係、および家族からの影響について質問した。

Ⅲ. 結果

1. 理想・予定ライフコースとその理由

理想ライフコースは専業主婦コース4人(13.3%)、両立コース20人(66.7%)、再就職コース3人(10.0%)、DINKS 0人(0%)、非婚就業2人(6.7%)⑥その他1人(3.3%)であった。

理想ライフコースの選択理由を内容分析した結果、主要なカテゴリーとして1) 経済的理由14人(夫の収入だけでは生活が厳しい・二人で働いた方が生活は潤う・今の豊かな生活は母の両立のお陰なので自分もそうしたいなど)、2) 内発的動機16人(ずっと正社員で仕事をしたい、仕事をしたい、外の世界に触れていたいなど)、3) 育児優先7人(子どもが下校した時に、お帰りがさいと迎えてやりたい。母親のように育児を優先したいなど)、4) その他(母親として仕事でも頑張っている姿を子供に見せたい、家事だけでは単調な生活になる、家庭を持つより自分の趣味を大切にしたいなど)に分類された。なお、2つ以上の理由を挙げた人もいる。

予定ライフコースは専業主婦コース0人、両立コース17人(56.7%)、再就職コース10人(33.3%)、DINKS 1人(3.3%)、非婚就業1人(3.3%)、その他1人(3.3%)であった。予定ライフコースの選択理由を内容分析した結果、1) 制度的理由16人(育児休暇が取れるような企業への就職が難しいなど)、2) 経済的理由12人(夫の収入だけでは生活が厳しい・子供の教育費のためには働く必要があるなど)、3) 内発的動機9人(仕事への意欲など)、4) 育児優先16人(夫になる人の忙しさしだいで自分が育児を優先するなど)であった。

2. 家族や身近な人からの影響

影響を受けた身近な人物は、父親2人(6.7%)、母親13人(43.3%)、両親7人(23.3%)、きょうだい1人(3.3%)、親族の女性2人(6.7%)、アルバイト先の先輩4人(13.3%)であった。

母親との関係については83%が良好と回答し、母親を良き理解者とするものが90%、母親に悩みを相談する人が80%、母親のような育児をしたいと思うものが83%であった。母親のライフコースについては、専業主婦7人(23.3%)・両立6人(20%)・再就職16人(53.3%)・その他1人(3.3%)であった。母親の学歴については、高卒16人(53.3%)・専門学校卒5人(16.7%)・短大卒2人(6.7%)・大卒院卒7人(23.3%)であり、ライフコースへの満足度は高い母親が20人(66.7%)、満足度が低い母親が10人(33.3%)であった。

父娘関係が良好との回答は20人(66.7%)、良き理解者と思う者は22人(73.3%)でいずれも母親より低かった。

両親からの影響をあげた人は7人(23.3%)で、両親が共働きで家事を助け合っていることや、両親の仲が良く、結婚への良いイメージを持っている場合や、両親の不仲で結婚や男性への理想像に影響を受けている場合があった。

Ⅳ. 考察

面接結果から、ライフコース選択に影響を与える可能性があり、先行研究ではあまり注目されることのなかった要因として以下の5つの要因を上げることができる。

1) 基礎知識

就職活動を経験した4年生、キャリアに関して学習し新聞などの情報に関心を持っている3年生と、まだ関心の低い3年生では、将来予想される家計状況や経済状況、正規労働と非正規労働の就労条件の違いなど、働くことに関する基本的な知識に大きな違いがあることがうかがえる。正確な知識や情報が不足していると、現実的でない安易なライフコース選択を引き起こす恐れがある。

2) 進路に関する親の期待

本人の進路については、子ども任せで事後報告的な関わり方の親が多数派である。家庭では就業や社会情勢についての会話が少なく、具体的な進路についての家族から助言を受けて、それに従うとの回答はほとんどみられなかった。しかし、「親への感謝」「社会人となって親に恩返ししたい」などの表現で就業への意欲を示す回答が複数得られた。日頃の親子関係の中で、親の期待をどの程度感じているかによって、自分の進路に対する向き合い方も異なってくることが考えられる。

3) 「お帰りなさい」願望

「自分は寂しい思いをしたから、お帰りなさいと子どもの下校を迎えたいと高校生くらいまで思っていた」「帰ったらいつも母が迎えてくれ、愛情をかけてくれたから、自分もそうしたい」など、小学校低学年頃までの帰宅時の母親の在宅願望についての発言が過半数の18名からあった。このような経験は、子どもが幼い時期は外で仕事をせず家庭に留まろうとする傾向を強める可能性がある。

4) 母親の就業についての認識

上記のように、母親が両立型の場合、幼少期に母の不在を寂しく思ったり、早く仕事を辞めてほしいと思った時期もあったなど、母親の就業に対するネガティブな反応が多くみられた。しかし、その評価が変化したとする回答もある。特に、大学受験期に家庭の経済状況への認識を持ち、それを契機に「就業して恩返しをしたい」「奨学金を返せるよう就業したい」「母が働いていたお陰での経済的な豊かさがあってと認識を改めた」「習い事を含む教育費を掛けてくれたことへの感謝と自分の子にもできる限りさせたい」など、ポジティブな方向への変化が見られる。家計を豊かにすることで子どものためになりたいという気持ちがライフコース選択に影響を与える可能性もある。

5) 老親の介護

親の老後について、親からは「迷惑を掛けたくない」「経済的に準備しているから心配しないでよい」「介護が必要になったらすぐに施設に入れてほしい」と言われていると回答した者が7割であった。しかしその一方で、子どもとしてできる限りの世話をしたいとの回答が9割にのぼった。女子大学生においても、将来の老親介護のことがライフコース選択に影響を及ぼす可能性が示唆される。

本調査

1. 方法

手続き：R大学の3・4年生が受講する心理学部の授業の前後に個別に質問紙を配布し、回収した。また、同大学キャリアサポートセンター主催の3年生向けセミナー終了後の廊下で個別に配布し、回収日を明記し後日回収した。また、G大学の3・4年生に自宅にて記入依頼をし、後日回収した。配布総数は220部で回収は168部であった（回収率76.4%）。参加者内訳：回収質問紙総数は168部。有効回答者数は都内3大学の人文系学部にて在学中の3年生107名、4年生56名の計163名の女子大学生である。

質問紙の構成：質問紙はフェイスシートその他、ライフコース選択、母親のライフコース、性役割志向性、キャリア志向性など個人の価値観、態度、志向性などの内的要因を測定する質問項目、および両親との関係に関する質問項目から構成された。

1. 理想のライフコース（なりたい私）と予想するライフコース（なるだろう私）

国立社会保障・人口問題研究所の定義による女性のライフコース5種類<1. 専業主婦コース 2. 両立コース 3. 再就職コース 4. DINKSコース 5. 非婚就業コース>をそれぞれの定義と共に示し、理想ライフコース（なりたい私）の選択を求めた。5種類のどれにもあてはまらなければ、6の「その他」を選択し、1つに決められなければ、第2、第3希望まで記入を求めた。

予定ライフコース（なるだろう私）についても理想ライフコースと同様な方式で選択するよう求めた。理想コースと予想コースが異なる場合、理想と予想が違う理由を自由記述形式で回答を求めた。

2. 母親のライフコース

母親のライフコースを専業主婦コース・両立コース・再就職コース・その他の4つの中から選択するよう求めた。また、母親自身のライフコース満足度を「1. とても不満」から「5. 非常に満足」の5件法で回答を求めた。母親の最終学歴について差し支えなければ教えて下さいとし、中学卒・高校卒・専門学校卒・短大卒・大学卒・大学院卒の6種類の中から選択することを求めた。

3. 離職意志と復職意志

離職の契機となり得る6つのライフイベント（結婚・出産・育児期の夫の転勤・夫婦のみの夫の転勤・自分の親の介護・夫の親の介護）に際して、仕事を辞める気持ちの程度を「1. 絶対に辞めない」から「5. 絶対に辞める」の5件法で回答を求めた。

次に、出産や育児で一度離職した後、社会で活動するとしたらどのようなことを希望するか、予備調査の回答から得た7項目を作成した。それぞれの項目について「1. 絶対にいや」「2. 望まない」「3. 時と場合による」「4. 希望する」「5. 強く希望する」の5件法で回答を求めた。

4. キャリア志向性

盧(2011)が作成した「ライフキャリア志向性」の尺度項目を抜粋して採用した。盧は首都圏の大学4年生と大学院生、大学を卒業して間もない社会人を対象に、女子青年の「ライフキャリア志向性」を調査し、尺度構成を行った。ライフキャリア志向性尺度の因子分析の結果、第1因子「自律的積極的方向付け」、第2因子「目標達成への方向付け」、第3因子「自己効力感」の3因子で構成されていることを明らかにした。第1因子の「自律的積極的方向付け」は13項目で構成されており十分な信頼性が確認されている。本研究では13項目の中から負荷量の高い4項目を抜粋した。それに予備調査で得られた就業や進路に関する回答を踏まえて作成した8項目を加えた12項目とし、「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

5. 経済・家計に関する基礎知識

厚生労働省統計・総務省統計・内閣府男女共同参画局資料・文部科学省統計から得た家計に関する問題を5問作成し、3択での回答を求めた。問題は、1) 大学卒の初任給は1ヶ月いくらくらいか。15万円・20万円・30万円から選択。2) 大学卒業後8年間就業し、30歳以降は専業主婦になった女性の生涯賃金(在職8年分のみ)はいくらくらいか。1000万円・3000万円・5000万円から選択。3) 女性が定年まで正社員で働くと、生涯賃金はいくらくらいか。8000万円・1億2000万円・1億8000万円から選択。4) 子供の教育費について、幼稚園~高校(公立)・大学(私立文系)のコースでいくらくらいかかるか。700万円・1000万円・1500万円から選択。5) 定年退職後の無職の夫婦の1ヶ月の生活費はいくらくらいかかるか。15万円・25万円・30万円から選択。

6. ISRO(性役割志向性尺度)

性役割志向性を測るために、Dreyer, Woods, & James(1981)の性役割志向性尺度(Inventory of Sex-Role Orientation、以下ISROと略記)の日本語版(東, 1990)を使用した。女性の就業や育児との両立、夫の家事参加に関する項目が含まれており、性役割やジェンダー度、キャリア志向性とも関連する尺度項目と考えた。質問項目は16項目である。それぞれに対し「1. 非常に反対」から「5. 非常に賛成」までの5件法で回答を求めた。

7. 父親の家事育児参加度

父親の家事参加度を測るために、予備調査で使用した西宮市配布の父子手帳に記載されている「夫にやって欲しい家事8項目」のうち「ゴミ出し」「洗濯」「料理・食事の支度」「掃除」「食後の片付け・皿洗い」の5項目に、「あなたの小さかった時の世話(送迎など)」を加えた6項目について「全くやらない」「少しだけ(半分以下)」「半分程度担当」「半分以上担当」「100%担当」の5件法で回答を求めた。なお、予備調査の結果を踏まえて削除したのは「買い出し・荷物持ち」「自分自身のこと」「布団の上げ下ろし」の3項目である。

8. 育児観と家事能力

予備調査の回答を踏まえて、本人の育児と仕事の両立に関する7項目を作成した。それぞれについて「絶対望まない」「望まない」「時と場合による」「望む」「強く望む」の5件法で回答を求めた。

同様に予備調査の回答を踏まえて、本人の家事・育児の適性能力に関する4項目を作成した。それぞれについて「全く当てはまらない」「やや当てはまらない」「どちらでもない」「やや当てはまる」「非常に当てはまる」の5件法で回答を求めた。

9. 母親との関係

母親との関係については、幼少期・現在・将来の3つに分けて回答を求めた。幼少期の母親への愛着については、酒井(2001)による就学前の母子関係に関する尺度項目からの抜粋と自作項目を加えて採用した。酒井(2001)は愛着研究の概念である内的作業モデル理論を「自己に関する内的作業モデル」と「他者に関する内的作業モデル」の2因子構造とする立場(Bartholomew, 1990)から、青年期の愛着関係に関する質問項目を作成し、「就学前の安定的な母子関係」、「就学前の拒否的な母子関係」、「就学前のアンビバレントな母子関係」の3つの下位尺度から成る愛着尺度を構成した。本調査では、「就学前の安定的な母子関係」6項目から負荷量の高い3項目、「就学前の拒否的な母子関係」5項目から負荷量の高い4項目の7項目を抜粋して使用した。また、予備調査の回答で得た「小学生の頃、帰宅して母が居

ないと寂しかった」と「幼い頃帰宅して母から「お帰りなさい」と言ってもらえると嬉しかった」の2項目を加えた。

現在の母娘関係について、水本（2011）による「母子関係における精神的自立尺度」を採用した。水本（2011）は青年期から成人期への移行期における母娘関係について、大学生女性に対する質問紙調査を行い、精神的自立のプロセスにある女性の母親との関係を明らかにすることを目的とする尺度を作成した。母子関係における精神的自立尺度の因子分析を行い、第1因子「母親との信頼関係」（ $\alpha = 0.83$ ）と第2因子「母親からの心理的分離」（ $\alpha = 0.65$ ）を抽出した。第1因子の6項目全てと第2因子5項目の中から4項目を採用し、予備調査の回答で得られた「母親に感謝している」を合わせて11の尺度項目とした。

将来の母親との関係については予備調査での回答を踏まえ、結婚や育児、介護などについて6項目を新たに作成した。

以上の母娘関係に関する幼少期9項目、現在11項目、将来6項目について「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

10. 父親との関係

父親との関係については、母親との関係に関する項目を父親に置き換えて、幼少期の父娘関係に関して3項目、現在の関係について5項目、将来について3項目の計11項目を選択した。その他に面接調査の回答を踏まえた4項目を加えた。具体的には「結婚するなら父親のような男性がいいと思う」「父は理不尽な叱り方をする」「父は<男は仕事、女は家庭>と考えているようだ」「父とはあまり話をしない」で父のジェンダー度や父娘関係、父への愛着を確認する項目と考えた。合計15項目の尺度項目に対して「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常に当てはまる」までの5件法で回答を求めた。

II. 結果

尺度構成

本研究で使用した尺度のうち、ISRO）日本語版は既に標準化されていることから、東（1990）にしたがって得点化した。その他の尺度項目については既存尺度から抜粋して使用した項目と自作の項目を合成したものであることから、項目分析の上、尺度化を試みた。

1. 離職意志尺度

離職意志については結婚や出産などの6項目のライフイベントに際して離職する気持ちの程度を5件法で回答を求めた。主成分分析の結果、第1主成分の負荷量は最も低い「夫が遠隔地（海外を含む）転勤となった（夫婦のみ）」で.623となり、分散の44%を説明し、一次元性が確認された。6項目の内的一貫性を示す信頼性係数 $\alpha = .743$ であった。なお、離職意志と一緒に回答を求めた復職意志に関する質問7項目については、次のキャリア志向性尺度の中で分析した。

2. キャリア志向性尺度

盧（2011）による「自律的積極的方向付け」尺度項目4項目、予備調査で得られた就業や進路に関する回答を踏まえて作成した8項目、および復職意志に関する7項目を合わせた19項目で因子分析（主因子法）を行った（表1）。その結果、3因子が抽出された。各因子で因子負荷量の大きい項目により尺度化を試みた。

第1因子に負荷量が高いのは「希望する仕事に就こうと、努力している」「これからの人生（仕事）を通して、さらに自分自身を伸ばして高めていきたい」などで、この因子は「向上心」因子と命名された。向上心尺度のCronbachの $\alpha = .776$ で十分な信頼性が確認された。第2因子では「結婚して夫の収入だけで十分な生活ができたとしても、仕事はしたい」「結婚しても、夫に経済的に依存しなくて済むようになりたい」など経済的な自立を志向する項目で負荷量が高いことから「経済的自立志向」因子と命名された。経済的自立志向尺度のCronbachの $\alpha = .715$ で十分な信頼性が確認された。

なお、第3因子は、「出勤せず、在宅のみできる仕事をする」「大学卒業後は、昇進できなくてもいいので、転勤がなく、9時5時で勤務できる仕事につきたい」といった私生活の充実を志向する内容の項目で負荷量が高いことから「ワークライフバランス志向」因子と命名された。なお、このワークライフバランス志向尺度についてはCronbachの $\alpha = .565$ で十分な信頼性は得られなかった。

3. 育児観と家事育児適性能力

本人の育児と就業の両立に関する7項目について因子分析を行った（表2）。その結果2因子が抽出された。第1因子

表1 キャリア志向性についての因子分析（主因子法 バリマックス回転）

項目内容	向上心	経済的 自立志向	ワークライフ バランス志向	h^2
希望する仕事に就こうと、努力している。	.691	-.011	.046	.480
これからの人生（仕事）を通して、さらに自分自身を伸ばして高めていきたい	.678	.314	-.084	.565
人生設計は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている	.659	.090	.024	.443
人生（仕事）で難しい問題に直面しても、自分なりに積極的に解決していくつもりだ	.645	.059	-.075	.425
大学卒業後は、男性と同等に責任のある仕事を任せられるような職業につきたい	.536	.343	-.290	.489
大学卒業後は、自分の能力や適性を生かした仕事がしたい	.343	.209	-.044	.163
結婚して夫の収入だけで十分な生活ができたとしても、仕事はしたい	.177	.708	-.394	.688
結婚しても、夫に経済的に依存しなくて済むようになりたい	.125	.666	-.146	.480
一度仕事についたら、定年になるまでキャリアを中断したくない	.128	.567	-.136	.356
離職前と同じ業界に再就職してキャリアを積む	.187	.420	-.239	.268
大学卒業後は、育休制度や介護制度が充実しているところで仕事をしたい	-.083	.412	.241	.235
新しく資格をとって専門的な仕事をする	.093	.395	.136	.183
出勤せず、在宅のままでできる仕事をする	-.095	-.060	.554	.320
経済的に困らなければ、何もしない	-.215	-.429	.531	.512
パートやアルバイトとして働く	-.074	-.218	.404	.216
大学卒業後は、昇進できなくてもいいので、転勤がなく、9時5時で勤務できる仕事につきたい	-.405	-.033	.375	.306
趣味や好きな活動のサークルなどに参加する	.073	.147	.312	.124
ボランティアや地域の活動をする	.025	-.083	.277	.084
大学卒業後は、両親の住む実家から通えるところで仕事をしたい	-.217	.111	.270	.132
固有値	2.583	2.318	1.570	
分散の%	13.6	12.2	8.3	
累積%	13.6	25.8	34.1	

表2 育児観についての因子分析（主因子法 バリマックス回転）

質問項目	育児優先	両立志向	h^2
小学校低学年までは下校した時家にいてやりたい	.826	-.142	.700
3歳までは自分の手元で育てたい	.671	-.199	.490
中学生になるまでは、子どもの世話を優先したい	.548	-.056	.303
子どもはほしい	.479	.116	.243
3年間の育児休暇（0歳～2歳）を終えて復職したい	-.016	.725	.526
0歳から保育園に預けて復職したい	-.234	.614	.432
母として仕事でも頑張っている姿を子供に見せたい	.032	.469	.221
因子寄与	1.72	1.20	2.91

に負荷量の高かったのは「小学校低学年までは下校した時家にいてやりたい」「3歳までは自分の手元で育てたい」など育児重視の項目であることから、これを「育児優先」因子と命名した。育児優先尺度の信頼性統計量 Cronbach の $\alpha = .711$ で十分な信頼性が確認された。第2因子では「3年間の育児休暇（0歳～2歳）を終えて復職したい」「0歳から保育園に預けて復職したい」「母として仕事でも頑張っている姿を子供に見せたい」で負荷量が高く、「育児仕事両立志向」因子と命名された。育児仕事両立志向尺度の信頼性統計量 Cronbach の $\alpha = .62$ で信頼性は確認された。

なお、同様に本人の家事・育児の適性能力に関する4項目について主因子法で因子を抽出し家事適性因子2項目、育児適性因子2項目に分かれた。

4. 家計に関する基礎知識

厚生労働省他の官公庁の統計資料から得た家計に関する問題を5問作成し、3択での回答を求めた。正解を1、不正解を0として得点化した。学年別に経済知識の差を問題別にクロス表を作成し、 χ^2 乗検定を行ったところ、大卒初任給の回答のみ学年間に有意な差がみられたが、他の4問についての学年差はなかった。正答率は大卒初任給に対する4

年生で80%と高かったが、女性が正社員として定年まで勤務した場合の生涯賃金の正答率は3年生11.3% 4年生28.6%と極めて低かった。正解は1億8000万円であるにもかかわらず、生涯賃金を低く（1億2000万円や8000万円）認識している者が、3年生で88.7%、4年生で71.4%にもなった。

5. 親との愛着尺度

両親との関係については、母親との幼少期の関係についての9項目、現在の母親との関係についての11項目、将来の母親との関係についての6項目と、父親との関係についての15項目に対して、それぞれ5件法で回答を求めた。これらの全ての項目を合わせた46項目の因子分析（主因子法）を行った（表3）。その結果10因子が抽出され、因子負荷量の高い項目により10尺度が構成された。

表3 a 両親との関係についての因子分析（主因子法 バリマックス回転）

質問項目	父娘関係	母娘信頼関係	幼少期拒否的母娘関係	幼少期母娘愛着	母親離れ	両親との相互扶助	お帰りのない願望	親からの自立期待	父の性役割観	親からの結婚期待
今、父親は私の考え方を尊重してくれていると感じる	.822	.091	.069	-.009	.083	.122	-.012	-.007	-.122	.073
今、父親は私の事を信頼してくれていると思う	.809	.250	.128	.016	.083	.074	-.135	-.035	-.114	.183
父親は、いざという時には何を置いても私を助けようとしてくれるだろう	.745	.136	-.114	-.064	.040	.078	.246	.055	.113	.139
父親に感謝している	.740	.120	-.047	.018	-.021	.104	.067	.184	.179	.040
父とはあまり話をしない	-.711	.052	.090	.024	.059	-.018	-.030	-.198	.291	.134
幼少期に父親と遊ぶのが楽しかった	.689	.027	-.042	.359	-.099	.019	.286	-.015	.192	-.040
結婚するなら、父親のような男性がいいと思う	.655	-.030	.093	.142	-.115	.019	-.054	.118	-.196	.051
幼少期に父親と出かけるのがうれしかった	.640	.032	-.053	.339	-.029	.001	.314	-.053	.177	.017
幼い頃、私は父親の愛情が薄いと思ったことがあった	-.633	-.022	.260	.027	.135	.050	.033	.018	.024	.001
最近、父親に理解されていないと感じることが多い	-.620	-.090	.135	.067	.171	.054	.111	-.095	.377	-.102
父は理不尽な叱り方をすることがある	-.495	-.112	.118	-.093	.003	-.015	.307	-.010	.320	-.108
母親は私の考え方を尊重してくれていると感じる	.109	.820	-.076	.041	-.014	.041	.149	.064	-.049	-.026
母親は私の事を信頼してくれていると思う	.071	.805	-.100	.066	-.094	.063	.020	-.070	-.071	.080
私が親になったら、母親がしてくれたのと同じように子どもにしてあげたいと思う	.079	.720	-.275	.182	-.220	.085	.230	.006	.005	.044
母親に理解されていないと感じることが多い	.023	-.715	.242	-.006	.235	.076	.116	-.109	.023	-.055
母に感謝している	.041	.680	-.202	.289	.011	.071	.078	.030	.036	-.073
母親の生き方を支持している	.135	.664	-.017	.118	-.117	.116	-.081	-.023	-.039	-.080
母親は、いざという時には何を置いても私を助けようとしてくれるだろう	.061	.597	-.219	.167	.025	.158	.181	.073	.004	.045
幼い頃いつか母に見捨てられるのではないかと思った	-.042	-.302	.658	-.190	.091	-.264	.089	.158	.012	-.083
幼い頃、私が泣いていても、母親は関心がなかった	-.040	-.313	.630	-.142	-.019	.101	-.082	-.203	.085	.037
幼い頃、助けてほしいときに、母親は助けてくれなかったことがあった	-.232	-.394	.594	.025	.075	-.031	-.190	-.084	-.035	-.135
幼い頃、私は母親の愛情が薄いと思ったことがあった	-.047	-.256	.586	-.237	.144	.036	.126	.000	.035	-.055
幼少期に母親と出かけるのがうれしかった	.144	.497	-.164	.683	-.070	.039	.151	.070	-.035	.045
幼少期に母親と遊ぶのが楽しかった	.101	.437	-.261	.678	-.071	.001	.116	.010	-.064	-.003
幼少期に母親のそばでは安心感があった	.093	.419	-.309	.617	-.039	.122	.094	.056	-.116	.021

表3b 両親との関係についての因子分析（主因子法 バリマックス回転）

質問項目	父娘関係	母娘 信頼関係	幼少期 拒否的 母娘関係	幼少期 母娘愛着	母親離れ	両親との 相互扶助	お帰りの さい願望	親からの 自立期待	父の 性役割観	親からの 結婚期待
私の人生は母親の人生とは別の独自の ものである	-.129	-.100	-.020	-.010	.656	-.149	-.009	-.047	-.006	.000
私には、母親とは異なる独立した 考えがあると思う	-.028	-.326	.101	.110	.573	-.069	-.092	.038	.003	-.030
母親の事を一人の人間として客観 的に見ている	-.030	-.058	-.001	-.082	.572	-.054	.025	-.020	.176	-.009
母親の考えや期待にとらわれず、 自分の信じたとおりに行動する	.022	-.013	.105	-.057	.486	-.026	.064	.138	-.041	-.052
結婚したとしても、家事の手伝いや経済 的なことで母親からの援助を期待している	.135	.105	.068	-.013	-.041	.621	.064	-.087	-.041	-.046
私に子どもができれば、母親にも 育児に協力してもらいたい	.002	.242	-.121	.167	-.022	.579	.074	-.130	-.124	.054
母親は、私に老後の面倒をみてもら うことを希望している	-.012	-.127	-.009	-.020	-.179	.483	-.033	.149	.086	.216
結婚したとしても、できるだけ母親 のそばに住み続けたい	.022	.327	-.111	.087	-.201	.480	.095	.103	.046	.003
父親は、私に老後の面倒をみてもら うことを希望している	.114	-.064	.049	-.181	-.054	.414	.102	.236	.316	.102
幼いころ帰宅して母から「お帰りの さい」と言ってもらえると嬉しかった	.242	.408	-.093	.201	.128	.079	.542	-.009	-.032	.180
小学生の頃、帰宅して母が居ないと 寂しかった	-.027	.242	.050	.164	-.001	.235	.533	.011	-.156	.059
母親は私が仕事を通して経済的に 自立することを望んでいる	.037	.049	-.048	.113	.066	.063	.056	.673	-.118	.034
父親は私が仕事を通して経済的に 自立することを望んでいる	.285	.076	-.032	-.068	.042	-.059	-.076	.607	.081	.090
父は〈男は仕事、女は家庭〉と考 えているようだ	-.257	-.058	.034	-.047	.125	-.007	-.153	-.062	.615	-.049
母親は、私がいつかは結婚して子 どもを産むことを期待していると思う	.164	.021	-.131	.052	-.155	.091	.140	.046	-.121	.775
父親は、私がいつかは結婚して子 どもを産むことを期待していると思う	.445	.006	.001	-.058	.120	.230	-.059	.276	.160	.535
合計	5.913	5.317	2.202	2.051	1.738	1.722	1.298	1.252	1.172	1.162
分散の%	14.4	13.0	5.4	5.0	4.2	4.2	3.2	3.1	2.9	2.8
累積%	14.4	27.4	32.8	37.8	42.0	46.2	49.4	52.4	55.3	58.1

第1因子に負荷量の高い項目は、「今、父親は私の考え方を尊重してくれていると感じる」「今、父親は私の事を信頼してくれていると思う」「父親は、いざという時には何を置いても私を助けようとしてくれるだろう」など、父親との良好な関係を示す内容となっており、「父娘関係」因子と命名された。4つの逆転項目を合わせた父娘関係尺度のCronbachの $\alpha = .906$ で十分な信頼性が確認された。

第2因子に負荷量の高い項目は、「母親は私の考え方を尊重してくれていると感じる」「母親は私の事を信頼してくれていると思う」「私が親になったら、母親がしてくれたのと同じように子どもにしてあげたいと思う」「母親に理解されていないと感じることが多い(R)」など、母親との信頼関係を示しており、「母娘信頼関係」因子と命名できる。母娘信頼関係尺度のCronbachの $\alpha = .896$ で十分な信頼性が確認された。

第3因子で負荷量の高い項目は、「幼い頃いつか母に見捨てられるのではないかと思った」「幼い頃、私が泣いていても、母親は関心がなかった」「幼い頃、助けてほしいときに、母親は助けてくれなかったことがあった」「幼い頃、私は母親の愛情が薄いと思ったことがあった」で、この因子は「幼少期拒否的母娘関係」因子と命名された。幼少期拒否的母娘関係尺度のCronbachの $\alpha = .796$ で十分な信頼性が確認された。

第4因子で負荷量の高い項目は、「幼少期に母親と出かけるのがうれしかった」「幼少期に母親と遊ぶのが楽しかった」「幼少期に母親のそばでは安心感があった」であった。したがって、この因子は「幼少期母娘愛着」因子と命名された。幼少期母娘愛着尺度のCronbach $\alpha = .904$ で十分な信頼性が確認された。

第5因子に負荷量の高い項目は、「私の人生は母親の人生とは別の独自のものである」「私には、母親とは異なる独立

した考えがあると思う」「母親の事を一人の人間として客観的に見ている」「母親の考えや期待にとらわれず、自分の信じたとおりに行動する」であった。したがって、この因子は「母親離れ」因子と命名された。母親離れ尺度の Cronbach の $\alpha = .669$ で十分な信頼性が確認された。

第 6 因子で負荷量の高い項目は、「結婚したとしても、家事の手伝いや経済的なことで母親からの援助を期待している」「私に子どもができたなら、母親にも育児に協力してもらいたい」「母親は、私に老後の面倒をみてもらうことを希望している」「結婚したとしても、できるだけ母親のそばに住み続けたい」「父親は、私に老後の面倒をみてもらうことを希望している」であった。したがって、この因子は「両親との相互扶助」因子と命名された。両親との相互扶助尺度の Cronbach の $\alpha = .646$ で、十分な信頼性が確認された。

第 7 因子に負荷量の高い項目は「幼いころ帰宅して母から「お帰りなさい」と言ってもらえると嬉しかった」「小学生の頃、帰宅して母が居ないと寂しかった」の 2 項目であった。したがって、この因子は「お帰りなさい願望」因子と命名された。2 項目間の相関関係は Pearson の相関係数 = .505 は 1% 水準（両側）で有意であった。

第 8 因子に負荷量が高かったのは「母親は私が仕事を通して経済的に自立することを望んでいる」「父親は私が仕事を通して経済的に自立することを望んでいる」であった。したがって、この因子は「親からの自立期待」因子と命名された。2 項目間の相関関係は Pearson の相関係数 = .421 で 1% 水準（両側）で有意であった。

なお、第 9 因子と第 10 因子は、負荷量の高い項目からそれぞれ「父の性役割観」因子、「親からの結婚期待」因子と命名したが、項目数が少なく寄与率が低いことから尺度化しなかった。

7. 父親の家事育児参加度

父親の家事育児参加度 6 項目について主成分分析を行った結果、第 1 主成分の負荷量は最も低い「あなたが小さかった時の世話（送迎など）」で .611 となり、分散の 49% を説明し、次元性が確認された。内的一貫性を示す Cronbach の $\alpha = .789$ であった。

以上の分析の結果、個人の態度・価値観・志向性などの内的要因について 10 尺度（性役割志向性・離職意思・向上心・経済的自立志向性・ワークライフバランス志向・経済知識・育児優先・育児仕事両立志向・家事適性・育児適性）、家族関係に関する 8 尺度（父娘関係・母娘信頼関係・幼少期拒否の母娘関係・幼少期母愛着・母離れ・両親との相互扶助・お帰りなさい願望・親からの自立期待）が新たに構成された。

理想・予定ライフコース選択

第 1 理想ライフコース選択の学年別単純集計を表 4 に示す。3 年生・4 年生ともに最多は両立コースで、次いで専業主婦コース、3 位が再就職コースであった。全 163 名のうち、DINKS コースは 4 名（2.5%）、非婚就業コースは 8 名（4.9%）、その他は 2 名（1.2%）であった。選択者数が少ないこれら 3 コースを選んだ 14 名については、ライフコース別の分析で削除される恐れがあるため、第 2 理想の選択（専業主婦・両立・再就職）を使うことで再分類した。その結果、第 2 理想が空欄、あるいは第 2 理想でも「専業主婦」「両立」「再就職」以外を選択した 8 名が除かれ、全 155 名となった。

表 4 学年と第 1 理想のクロス表

学年		第 1 理想					合計	
		専業主婦	両立	再就職	DINKS	非婚就業		その他
3	<i>n</i>	36	48	15	1	6	1	107
	学年の%	33.6%	44.9%	14.0%	0.9%	5.6%	0.9%	100.0%
4	<i>n</i>	14	27	9	3	2	1	56
	学年の%	25.0%	48.2%	16.1%	5.4%	3.6%	1.8%	100.0%
合計	<i>n</i>	50	75	24	4	8	2	163
	学年の%	30.7%	46.0%	14.7%	2.5%	4.9%	1.2%	100.0%

母親のライフコースとの関連

母親のライフコースは専業主婦 44 人、両立 46 人、再就職 66 人、その他 5 人であった。母親のライフコースと女子大学

表5 第1 予定ライフコース（除その他）と母親のライフコースのクロス表

		母親のライフコース				
			専業主婦	両立	再就職	合計
第1 予想 (除その他)	専業主婦	<i>n</i>	10	4	8	22
	第1 予想（除その他）の%		46%	18%	36%	100%
	調整済み残差		1.9	-1.2	-0.7	
両立		<i>n</i>	17	29	14	60
	第1 予想（除その他）の%		28%	48%	23%	100%
	調整済み残差		0.0	4.2	-3.9	
再就職		<i>n</i>	8	6	24	38
	第1 予想（除その他）の%		21%	16%	63%	100%
	調整済み残差		-1.1	-2.0	2.9	
DINKS		<i>n</i>	0	1	6	7
	第1 予想（除その他）の%		0%	14%	86%	100%
	調整済み残差		-1.7	-0.9	2.3	
非婚就業		<i>n</i>	9	5	15	29
	第1 予想（除その他）の%		31%	17%	52%	100%
	調整済み残差		0.4	-1.5	1.1	
合計		<i>n</i>	44	45	67	156
	第1 予想（除その他）の%		28%	29%	43%	100%

表6 母親ライフコース×理想のライフコース別の母子関係関連尺度得点の平均

母親の ライフコース	理想の ライフコース	母娘信頼関係			幼少期拒否的 母娘関係			幼少期母愛着			母離れ			お帰りがなさい 願望		
		N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
専業主婦	専業主婦	17	28.6	5.38	17	6.1	2.54	17	13.6	1.71	17	14.4	2.47	17	8.4	1.37
専業主婦	両立	14	26.9	6.92	15	7.7	4.51	15	12.5	3.12	14	16.3	1.67	14	7.2	2.01
専業主婦	再就職	8	29.3	3.99	8	7.3	3.70	8	13.4	1.49	8	16.4	2.50	8	7.5	1.12
両立	専業主婦	11	23.8	6.67	11	9.5	4.05	11	11.8	2.95	11	15.1	2.54	11	6.4	2.50
両立	両立	27	30.3	3.89	28	6.9	2.72	28	12.3	2.54	28	15.3	2.21	28	8.0	2.22
両立	再就職	4	30.0	3.67	4	8.5	1.12	4	14.0	1.22	4	15.3	2.28	4	7.8	1.79
再就職	専業主婦	15	25.3	6.58	16	8.0	3.57	16	11.5	3.77	16	15.4	2.72	16	7.7	2.17
再就職	両立	30	30.0	3.36	30	5.9	2.06	30	13.4	1.52	30	15.4	2.51	29	7.9	1.67
再就職	再就職	12	28.8	3.80	12	5.3	1.16	12	12.7	1.75	12	13.3	1.83	12	7.1	1.66
分散分析	母親		0.03	ns		3.32	*		0.59	ns		1.44	ns		0.22	ns
	理想		4.58	*		1.13	ns		1.43	ns		0.84	ns		0.18	ns
	交互作用		2.06	†		2.11	†		1.62	ns		2.21	†		1.77	ns

† p<.10 *p<.05 **p<.01

生の理想ライフコース選択の関連について Fisher の直接法による検定を行った結果、有意な関連は認められなかった (p=.120)。しかし、母親のライフコースと女子大学生の予定ライフコース（その他を除く）の関連は有意（Fisher の直接法で p=.000）であった（表5）。母親が両立コースの場合、子どもも両立コースを予想する確率が高く、再就職コースを予想する確率が低い。また母親が再就職コースの場合、再就職コースを予想する確率が高く、両立コースを予想する確率が低い。また、母親が専業主婦だと、専業主婦を予想する確率が高かった。

母親のライフコースと理想ライフコースが同じ人と違う人で、母子関係の質に違いがあるかどうかを検討するために、母子関係を測定する5尺度の得点平均について、母親ライフコースと理想ライフコースを要因とする2要因分散分析を行った（表6）。母娘信頼関係は理想ライフコースの要因の主効果が有意で、両立理想群で専業主婦理想群より高く、幼少期拒否的母娘関係は母親ライフコースの主効果が有意で、母親両立群で最も高かった。この2尺度では交互作用も有意傾向となった。単純主効果と多重比較の結果、母親両立群において、両立理想群は専業主婦群より母娘信頼関係が高く、幼少期拒否的母娘関係は低かった。また、母親再就職群でも両立理想群は専業主婦群より幼少期拒否的母娘関係が

低かった。母離れ尺度でも交互作用が有意傾向となり、母親再就職群の再就職理想群で他の2群より母離れが低かった。

理想ライフコース別の尺度得点の差

理想ライフコース別にすべての尺度得点の平均を求め（表7）、分散分析により検定した（表8）。その結果、経済知識、家事適性、育児適性の3尺度を除く7つの内的要因尺度で理想ライフコース間に有意な差が認められた。両立理想群は、経済的自立志向、向上心、育児仕事両立志向で高く、離職意志、ISRO、ワークライフバランス志向、育児優先で低かった。専業主婦理想群は再就職理想群と比較してもワークライフバランス志向、ISROで高く、経済的自立志向、育児仕事両立志向で低かった。他方、家族関係に関する尺度では、有意な差が認められたのは母娘信頼関係尺度と親からの自立期待尺度の2つのみで、いずれも専業主婦理想群で低かった。

相関分析

判別分析：個人の内的要因に関する10尺度（性役割志向性・離職意思・向上心・経済的自立志向性・ワークライフバランス志向・経済知識・育児優先・育児仕事両立志向・家事適性・育児適性）がライフコース選択に与える影響を検討するために判別分析を行った。基準変数となるライフコース選択はDINKS、非婚就業、その他を選択した者が合計14名（8.6%）と少数であったため、専業主婦、両立、再就職の3つの理想ライフコースとした。その結果、3群を判別する2つの正準判別関数を得た。1軸は固有値が1.617、Wilksの λ の値が0.341で有意であったが、第2軸である関数2は固有値が0.96と低く、Wilksの λ が0.913と大きく、有意ではなかった。結果の判別の中率は、元のグループ化されたケースのうち77.1%が正しく分類され、交差確認済みのグループ化されたケースのうち73.3%が正しく分類されるという結果になった。十分に高い判別率であると判断できる。

表9に構造行列を示した。関数1は経済的自立志向・育児仕事両立志向・ISRO（R）・ワークライフバランス型（R）・離職意志（R）で高い値を示している。即ち経済的自立志向、育児仕事両立志向が高く、逆に伝統的性役割やほどほどに働くワークライフバランス志向や、家族に関わるライフイベントで離職することに対しては負の働きを持つ関数と言える。この軸が専業主婦コースと両立コースを判別する軸である。プラスの値が高いほど両立コースであり、マイナスであれば専業主婦コース、中間の値が再就職コースとなる。

表7 第1理想とするライフコース選択別の尺度得点平均

	第1理想ライフコース											
	専業主婦			両立			再就職			合計		
	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD	N	M	SD
離職意志	48	20.8	2.46	74	17.4	3.37	24	19.7	2.24	146	18.9	3.30
経済的自立志向	46	17.4	3.58	75	22.9	2.71	24	21.0	2.22	145	20.8	3.81
向上心	50	21.5	2.86	75	23.3	3.72	23	21.5	3.13	148	22.4	3.46
ワークライフバランス型	48	25.0	2.97	75	21.3	3.77	24	22.9	2.81	147	22.8	3.76
ISRO	49	43.4	6.71	71	35.3	6.09	24	38.3	4.59	144	38.6	7.07
経済知識	50	2.1	1.12	75	2.3	1.21	23	2.5	1.31	148	2.2	1.20
育児優先	50	16.3	2.61	73	14.8	2.13	24	15.8	1.88	147	15.5	2.35
育児仕事両立志向	49	7.1	1.70	74	10.2	1.74	24	8.8	1.88	147	8.9	2.21
家事適性	50	5.1	1.62	75	4.5	1.70	24	4.6	1.47	149	4.7	1.65
育児適性	50	6.2	1.76	75	6.3	1.69	24	6.8	1.67	149	6.4	1.71
父娘関係	48	40.9	9.10	72	40.7	9.22	24	38.0	10.73	144	40.3	9.43
母娘信頼関係	47	26.3	6.33	72	29.4	4.75	24	29.2	3.95	143	28.3	5.37
幼少期拒否の母娘関係	48	7.6	3.54	73	6.6	3.06	24	6.5	2.72	145	6.9	3.19
幼少期母愛着	48	12.5	3.03	74	12.8	2.39	24	13.1	1.70	146	12.8	2.52
母離れ	48	14.9	2.58	73	15.5	2.29	24	14.6	2.63	145	15.2	2.46
両親との相互扶助	48	15.0	3.36	70	15.5	3.50	24	15.0	4.09	142	15.2	3.54
お帰りなさい願望	48	7.6	2.15	74	7.8	2.01	24	7.3	1.54	146	7.6	1.98
親からの自立期待	48	7.1	1.54	71	7.9	1.52	24	8.2	1.58	143	7.7	1.58
父家事参加	49	12.1	4.83	71	12.3	4.70	24	11.8	4.20	144	12.1	4.64

表8 理想ライフコース選択別尺度得点の差の検定(分散分析と多重比較)

尺度	Source	SS	df	MS	F	多重比較 p<.05
離職意志	ライフコース選択	355.74	2	177.87	20.74 **	専業主婦>両立
	誤差	1226.51	143	8.58		再就職>両立
	全体	1582.25	145			
経済的自立志向	ライフコース選択	853.32	2	426.66	49.18 **	両立>再就職>専業主婦
	誤差	1232.03	142	8.68		
	全体	2085.35	144			
向上心	ライフコース選択	118.08	2	59.04	5.21 **	両立>専業主婦
	誤差	1642.11	145	11.33		
	全体	1760.18	147			
ワークライフバランス志向	ライフコース選択	416.19	2	208.09	18.15 **	専業主婦>両立
	誤差	1651.00	144	11.47		専業主婦>再就職
	全体	2067.18	146			
ISRO	ライフコース選択	1909.86	2	954.93	25.71 **	専業主婦>両立
	誤差	5236.97	141	37.14		専業主婦>再就職
	全体	7146.83	143			
育児優先	ライフコース選択	68.51	2	34.25	6.66 **	専業主婦>両立
	誤差	740.24	144	5.14		
	全体	808.75	146			
育児仕事両立志向	ライフコース選択	271.52	2	135.76	44.43 **	両立>再就職>専業主婦
	誤差	440.05	144	3.06		
	全体	711.57	146			
母娘信頼関係	ライフコース選択	289.51	2	144.76	5.32 **	両立>専業主婦
	誤差	3808.04	140	27.20		
	全体	4097.55	142			
親からの自立期待	ライフコース選択	26.97	2	13.48	5.73 **	両立>専業主婦
	誤差	329.24	140	2.35		再就職>専業主婦
	全体	356.21	142			

*p<.05 **p<.01

表9 理想ライフコース選択を基準変数とする判別分析

尺度	関数	
	1	2
経済的自立志向	.700	.063
育児仕事両立志向	.639	-.241
ISRO	-.465	.062
離職意志	-.419	.435
ワークライフバランス志向	-.388	.187
育児優先	-.232	.280
家事適性	-.117	.056
向上心	.190	-.505
育児適性	.009	.378
経済知識	.045	.221

表10 理想のライフコース別の判別得点の平均値と標準偏差値

関数	理想コース	n	判別得点	
			M	SD
関数1	専業主婦	42	-1.769	1.164
	両立	67	1.058	0.901
	再就職	22	0.154	0.949
	DINKS	4	-0.245	0.714
	非婚就業	6	0.125	0.687
	その他	2	1.839	0.655
	合計	143	0.024	1.562
関数2	専業主婦	42	-0.114	1.063
	両立	67	-0.152	0.969
	再就職	22	0.679	0.967
	DINKS	4	-1.335	1.302
	非婚就業	6	-1.210	1.218
	その他	2	0.114	1.843
	合計	143	-0.086	1.097

次にこの関数1を使って、前述の判別分析では除外したDINKS、非婚就業、その他を選択した者も合わせ、全ての第1理想ライフコースごとの平均値を求めた。結果を表10に示す。DINKSコースの平均値がマイナスの値を示している。高いキャリア志向を追及するために子供を持たないという選択ではないことを示していると思われる。次に、母親の学

表11a 内的要因尺度得点を従属変数、家族関係尺度得点を独立変数とした重回帰分析

説明変数	経済的自立志向		育児仕事両立志向		ISRO	
	標準化β	t	標準化β	t	標準化β	t
父娘関係	-0.056	-0.631	-0.167	-1.847 †	0.147	1.573
母娘信頼関係	0.245	2.207 *	0.150	1.355	-0.181	-1.549
幼少期拒否的母娘関係	0.116	1.141	0.141	1.395	0.074	0.696
幼少期母愛着	-0.218	-2.109 *	0.154	1.486	0.154	1.415
母離れ	0.136	1.570	0.183	2.130 *	-0.274	-3.047 **
両親との相互扶助	0.105	1.238	0.191	2.245 *	-0.015	-0.168
お帰りなさい願望	0.073	0.799	0.022	0.239	-0.068	-0.705
親からの自立期待	0.316	3.740 **	0.229	2.718 **	-0.085	-0.968
父家事参加	0.084	0.952	0.175	1.964 †	0.059	0.638
R	0.447 **		0.434 **		0.372 *	
R ²	0.200		0.188		0.138	
adj. R ²	0.141		0.130		0.075	

† p<.10 *p<.05 **p<.01

表11b 内的要因尺度得点を従属変数、家族関係尺度得点を独立変数とした重回帰分析

説明変数	ワークライフ バランス志向		向上心		判別分析 関数 1	
	標準化β	t	標準化β	t	標準化β	t
父娘関係	0.014	0.153	0.062	0.669	-0.125	-1.310
母娘信頼関係	-0.176	-1.612	0.037	0.324	0.209	1.805 †
幼少期拒否的母娘関係	0.173	1.748 †	-0.039	-0.377	0.100	0.944
幼少期母愛着	0.229	2.217 *	-0.032	-0.301	-0.092	-0.844
母離れ	-0.243	-2.858 **	0.283	3.167 **	0.260	2.923 **
両親との相互扶助	0.259	3.085 **	-0.051	-0.577	0.074	0.838
お帰りなさい願望	0.138	1.529	0.198	2.099 *	0.031	0.327
親からの自立期待	-0.079	-0.942	0.062	0.711	0.348	3.992 **
父家事参加	-0.077	-0.880	0.003	0.029	0.128	1.361
R	0.460 **		0.362 *		0.476 **	
R ²	0.212		0.131		0.226	
adj. R ²	0.155		0.069		0.164	

† p<.10 *p<.05 **p<.01

歴別のライフコースに対する関数 1 からの判別分析の平均値を求めた。専業主婦の母親は全てマイナスの値を示した。両立型の母親は全てプラスの値を示した。

重回帰分析：判別分析の結果で判別係数の値の大きい尺度に着目して重回帰分析を行った。まず、第 1 軸で正の係数が高い経済的自立志向、育児仕事両立志向、負の係数で高い ISRO、離職意志、ワークライフバランス志向を従属変数、家族関係に関する 8 尺度（父娘関係・母娘信頼関係・幼少期拒否的母娘関係・幼少期母愛着・母離れ・両親との相互扶助・お帰りなさい願望・親からの自立期待）に父家事参加度を加えた 9 尺度を独立変数とする重回帰分析を行った。結果を表 11 に示した。経済的自立志向、育児仕事両立志向、ISRO、ワークライフバランス志向では有意な回帰モデルが得られたが、離職意志では有意なモデルが得られなかった。複数の尺度に有意な影響を与えたのは母娘信頼関係、母離れ、親からの自立期待の 3 尺度である。いずれも経済的自立志向や育児仕事両立志向に対して正の、ISRO やワークライフバランス志向に対して負の影響を与えていた。次に第 2 軸の係数が高い向上心と育児優先について同様な重回帰分析を行ったところ、育児優先については有意なモデルが得られなかった。向上心については母離れとお帰りなさい願望が正の影響を与えていた。

最後に判別分析で得られた関数 1 による次元 1 の判別得点を従属変数として同様の重回帰分析を行った。判別得点に与える家族からの影響は「母離れ」と「親からの自立期待」が 1%水準で有意であり、母離れをし、親からは自立を期

待されていることが、次元1に影響を与えることを明らかになった。

総合考察

尺度構成について

本研究で使用した個人の内的要因を測定する尺度は、既存の尺度である ISRO を除き、先行研究を参考にして自作したものである。尺度構成の結果、キャリア志向性尺度として「向上心」「経済的自立志向」「ワークライフバランス型」の3下位尺度を得た。また、育児観についての項目では、仕事や育児に対する価値観について「育児優先」「育児仕事両立志向」の2つの下位尺度が構成された。その他、ライフイベントによる離職意志の強さを測定する離職意志尺度、自分の適性評価として家事適性、育児適性尺度が構成された。

家族関係については、予備調査の知見を踏まえ、幼少期の母娘関係、現在の母娘関係、将来の母娘関係、幼少期から将来までの父娘関係を測るために、酒井（2001）や水本（2011）から抜粋した項目と自作の項目によって新たな尺度を構成した。全ての項目を合わせて因子分析し10因子（父娘関係・母娘信頼関係・幼少期拒否的母娘関係・幼少期母愛着・母離れ・両親との相互扶助・お帰りの願望・親からの自立期待・父の性役割観・親からの結婚期待）を抽出し信頼性を確認した。第6因子までは信頼性の高い尺度を構成できた。第7因子と第8因子についても得点化して検討したが、項目数が少なく信頼性には問題がある。第9因子と第10因子も含めて、独立した因子として抽出されたことから、今後、適正な尺度化が求められる。

仮説の検証

仮説1では、母親のライフコースが女子大学生のライフコース選択に影響を与え、母親と同じライフコース選択をする傾向があると予想した。理想ライフコース選択と母親のライフコースとの関連は認められなかった。しかし、予定ライフコースでは専業主婦・両立・再就職の主要なライフコースの選択が母親のライフコースと有意に関連し、母親と同じ予定ライフコースが選択される確率が高かった。この結果から、仮説1は一部支持されたといえる。特に母親が両立コースの場合に、その子どもの64%（29/45）が両立コースを予定ライフコースに選択し、統計的に有意ではなかったものの62%（28/45）が両立コースを理想ライフコースに選択しており、子どもへの影響が大きいことを示唆している。

さらに仮説1では、母親との関係によってその影響は異なると予想した。この仮説を検証するために、母親のライフコースと理想ライフコース選択によって母子関係に違いがみられるかどうかを5つの尺度で比較した。その結果によれば、関係が良好なほど母親と同じライフコースを選ぶだろうという仮説は支持されなかった。しかし、母親ライフコースが両立型の場合、理想ライフコース選択の違いに母子関係の特徴が反映されることを示唆する交互作用が見られた。この結果は、母親が両立型の場合、理想ライフコースとして母親と同じ両立型を選択した人は現在の母娘間の信頼関係が強く、幼少期の関係が拒否的ではなかったのに対して、専業主婦を選択した人は逆に母娘信頼関係が弱く、幼少期の関係を拒否的と感じていたことを示している。母親が再就職コースの場合にも、同様の傾向が認められる。これは、幼少期に母親が仕事を持ち、見捨てられ不安を感じるような愛情の拒否を経験したことがあると、子どもは就業するより家庭にいることを選ぶようになると解釈することができる。予備調査の結果から、お帰りの願望と専業主婦理想選択と関係が予想されたが、その予想は支持されなかった。しかし、幼少期拒否的母娘関係に示された結果は、就業する母親との間に十分な愛着が形成されていないと、大人になってから子どものために家庭にいてあげようという思いから専業主婦を理想とするようになる可能性が高いことを示している。

仮説2では、個人の価値観、態度、志向性（性役割志向性、キャリア志向性、育児観・職業観など）が女子大学生のライフコース選択に影響を与えると予想した。理想ライフコース別の尺度得点の平均は、この仮説を支持した。10尺度のうち経済知識、家事適性、育児適性を除く7尺度で有意な差が認められ、両立コースを選択した群では、他の群と比較して伝統的性役割志向（ISRO、育児優先、離職意志）が低く、キャリア志向性（経済的自立志向、向上心、育児仕事両立志向）が高いことが明らかにされた。

さらに、個人の内的要因とライフコース選択との関連を検討するために、ライフコースを3種類（専業主婦コース・両立コース・再就職コース）に絞った判別分析を行った。その結果、専業主婦と両立コースを判別する軸となる関数1が得られた。第2軸は再就職コースと専業主婦・両立コースを判別する関数となるが、有意な寄与は認められなかった。

なお、判別の的中率は77.1%である。個人の内的要因に関する尺度から理想ライフコースを判別できたことになり、仮説2は支持されたとと言える。

関数1によって得られる判別得点の平均から、両立コースは正に分布、専業主婦コースは負に分布し、再就職コースは中間の0点付近に分布することが示された。これはこの3コースが仕事と家庭を両軸とする一次元上に位置づけられることを示唆している。そこで、DINKSや非婚就業コース選択者は少数ではあったが、この関数を用いて判別得点を算出した結果、各選択者の特徴を読み取ることができる。たとえば、DINKSコースは一般的には昇進や社会的活躍を目指すキャリア志向の高い女性と捉えがちだが、関数1による判別得点は -0.245 でむしろ再就職コースに近いことがわかる。

仮説3では、家族関係は個人の価値観、態度、志向性に影響を与え、間接的にライフコース選択に影響を与えると予想した。家族関係に関連する尺度の中で、理想ライフコース別の得点平均に有意な差が見られたのは母娘信頼関係と親からの自立期待だけで、いずれも両立理想群で他の群より高かった。関係が良好なほど、また親から自立を期待されているほど両立コースを理想とする傾向が高いといえる。これは現在の両親、特に母親との関係が理想ライフコースに直接的な影響を与えていることを示唆している。

次に、家族からの間接的影響を検討するために、ライフコース選択の予想に有効だった個人の内的要因に関する尺度得点を従属変数、家族関係に関する尺度を独立変数とする重回帰分析を行った。経済的自立志向性と育児仕事両立志向性、ISROとワークライフバランス志向の結果から、親からの自立期待が高く、母娘の間に信頼関係が確立し、幼少期の母親への愛着が弱く、そして母離れしているほど理想ライフコースに両立を選択する傾向が強くなることが示された。特に、ライフコース選択の判別得点には母離れと親からの自立期待が強い影響を与えていた。なお、両親との相互扶助は育児仕事両立志向性とワークライフバランス志向の両方に正の影響を与えていたが、これは両親からの支援期待がキャリア志向性を高める方向に、両親の介護期待が逆の方向に影響を与えていた可能性がある。

このように、家族関係は直接ライフコース選択に影響を与えると同時に、ライフコース選択に影響を与える個人の内的要因にも影響を与えていることが示され、仮説3は支持された。しかし、有意な影響が認められたのは母親との関係に関わる尺度が多く、父親との関係の影響はわずかである。また、相対的に現在の関係性ほど強い影響を与えていたが、幼少期の母子関係の質や将来の親との関係性に対する期待の影響も認められた。また、母親離れや親の自立期待が両立コース選択と女子大学生の進路選択に対して家族関係、特に母親との関係は多様な影響を及ぼしていることが示唆される。

限界と展望

本研究では有効回答者が163名と少数であったため、ライフコース選択のグループ分けには少ない数であった。専業主婦・両立・再就職を判別する2軸のうち、両立と専業主婦を分ける第1軸を判別できたが、第2軸は有意とはならなかった。有意となる第2軸を得られれば、再就職といういったん離職する要因について、さらに分析ができるであろう。

今回の調査対象者のライフコース選択の順位は、理想ライフコース、予定ライフコースともに、1位は両立コースであった。城島・白河・幸田・城(2012)による中堅女子大学の学生509名の結果順位や、国立社会保障・人口問題研究所(2015)の18歳から34歳を対象とした調査結果では1位は再就職コースであった。この違いの要因として考えられることは、女子大学と共学大学の違い、対象年齢の幅、社会人や学生、学歴の差などが作用したことが考えられる。今後は、専門性の高い学部なども含め、調査対象者を増やして比較検討する必要がある。

労働力の不足が予想されるわが国で、将来の重要な労働力となるべく活躍が期待される女子大学生が、仕事と家庭の両立を目指す進路を選択するかどうかは、家計上の必要性や現実的な就業支援体制の整備状況などが影響を与えるだけでなく、女性自身が伝統的性役割観に縛られず、高いキャリア志向性を持つことが重要である。本研究は、女子大学生の性役割観やキャリア志向性に対して、母親との関係性のあり方が多様な形で影響を与えていることを明らかにした。特に、両立コースの選択には精神的な母親離れと両親からの自立期待が強い影響を与えることが示された。次は、母親離れや両親からの自立期待を高めている要因の探求が求められる。

引用文献

東 清和 (1990). 青年期における性役割志向性の性差 社会心理学研究, 6, 23-32.

- 大日義晴 (2015). 若年女性における理想ライフコースの形成要因 社会福祉 Social Welfare, **55**, 187-199.
- Dreyer, N. A., Woods, N. F., & James, S. A., (1981). ISRO: A scale to measure sex-role orientation. *Sex Roles*, **7**, 173-182.
- 城島博宣・白河桃子・幸田達郎・城佳子 (2012). 女子大学生の結婚観と職業観の調査 生活科学研究, **34**, 149-158.
- 金井壽宏 (2002) 働くひとのためのキャリア・デザイン PHP 新書187 PHP 研究所
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2016). 第15回出生動向基本調査 (結婚と出産に関する全国調査). (http://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/doukou15_gaiyo.asp).
- 小坂千秋・柏木恵子 (2007). 育児期女性の就労継続・退職を規定する要因 発達心理学研究, **18**, 45-54.
- Lease, S.H. & Dahlbeck, D.T. (2011). Parental influences, career decision-making attributions, and self-efficacy. *Journal of Career Development*, **36**, 95-113.
- 松浦素子 (2005). 母親の就労が青年期女子の仕事に対する価値観に及ぼす間接的な影響の検討 人間文化論業, **8**, 213-221.
- 宮城まり子 (2002). キャリアカウンセリング 駿河台出版社
- 水本深喜・山根律子 (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係—「母子関係における精神的自立尺度」の作成および「母子関係の4類型モデル」の検討— 教育心理学研究, **59**, 462-473.
- 中村三緒子 (2008). 大卒女性のライフコース分化の規定要因 日本女子大学大学院人間社会研究科紀要, **14**, 43-56.
- 盧 回男 (2011). 「ライフキャリア志向性」の尺度構成 日本女子大学人間社会研究科紀要, **17**, 95-103.
- 小川一夫・田中宏二 (1980). 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究、発達心理学研究, **28**, 64-67.
- 酒井 厚 (2001). 青年期の愛着関係と就学前の母子関係—内的作業モデル尺度作成の試み— 性格心理学研究, **9**, 59-70.
- 佐野まゆ・高田谷久美子・近藤洋子 (2007). 大学生における性役割志向によるライフコース観の比較 山梨大学看護学会誌, **6**, 45-52.
- Schein, E.H. (1978). *Career Dynamics: Matching individual and organizational needs*. Reading, MA: Addison-Wesley.
(シャイン, E.H. 二村敏子・三善勝代 (訳) (1991). キャリア・ダイナミクス 白桃書房)
- 鹿内啓子 (2007). 大学生の職業選択に対する職業意識と親の影響との関連性 北星学園大学文学部北星論集, **44**, 1-11.
- 鹿内啓子 (2012). 大学生における親との関係と職業未決定および就活不安との関連 北星学園大学文学部北星論集, **49**, 1-11.
- 杉田あけみ (2010). 「既婚女性が就業継続するか否かを決定する理由」および「役割分担に対する男女の考えと女性の働き方」について—「男女の能力発揮とライフプランに対する意識に関する調査」報告書から— 昭和女子大学女性文化研究所紀要, **37**, 29-49.
- 鈴木淳子 (1996). 若年女性の平等主義的性役割態度と就労との関係について—就労経験および理想の仕事キャリア・昇進パターン— 社会心理学研究, **11**, 149-158.
- 田中宏二・小川一夫 (1985). 職業選択に及ぼす親の職業的影響: 小・中学校教師・大学教師・建築設計士について 教育心理学研究, **33**, 171-176.
- 吉田 崇 (2004). M字曲線が底上げた本当の意味—女性の「社会進出」再考— 家族社会学研究, **16**, 61-70.
- 嘉本伊都子 (2004). 女子学生のライフコース設定と就労意識—2003年度質的社会調査を通して— 京都女子大学現代社会研究, **7**, 63-68.